

さきだいら
笹平遺跡

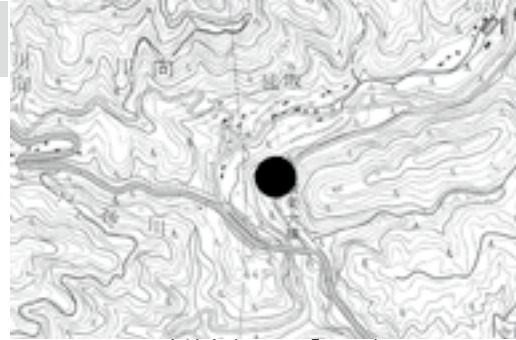
所在地 北設楽郡設楽町大字小松字笹平
(北緯35度06分45秒 東経137度34分01秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成27年5月～12月

調査面積 6,930㎡

担当者 鈴木正貴・蔭山誠一・川添和暁



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダム関連事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて、平成27年5月から12月にかけて実施した。調査面積は6,930㎡で、15A区・15B区・15C区の三調査区に大きく分けて調査を行った。

立地と環境 遺跡は境川の東側(左岸)、川に対して西に張り出す段丘上に立地する。段丘は、川側が標高385m前後と低いのにに対し、中央が標高387m前後と一段高くなる。川側の低い段丘部分をA区、高い段丘部分の西側半分をB区、東側半部分をC区とした。段丘の地盤形成層は古い河川堆積層で、山側(東側)ではシルト層が、谷側(西側)では砂層が主体となっており、A区とB区の境とB区とC区の境では巨礫が多く認められた。特に、B区・C区の巨礫群は旧河道由来の黑色土の中に存在しており、段丘の中心にある巨岩(笹平岩とする)もこの黑色土に伴うものである。

調査の概要 A区は厚さ1mの土石流堆積層の下で、層厚20cmほどを測る縄文時代晩期の包含層(黒褐色シルト層)および土坑・ピットなどの遺構が確認された。晩期包含層中で見つかった礫群は円弧を描くようにも見えるが、礫自体は河川由来の円礫ではなく山側由来の角礫である。調査区北端から岩偶岩版類が1点、南側では大型の撥形を呈する打製石斧が1点出土した。晩期包含層下には、層厚50cmを測る褐色砂層があり、

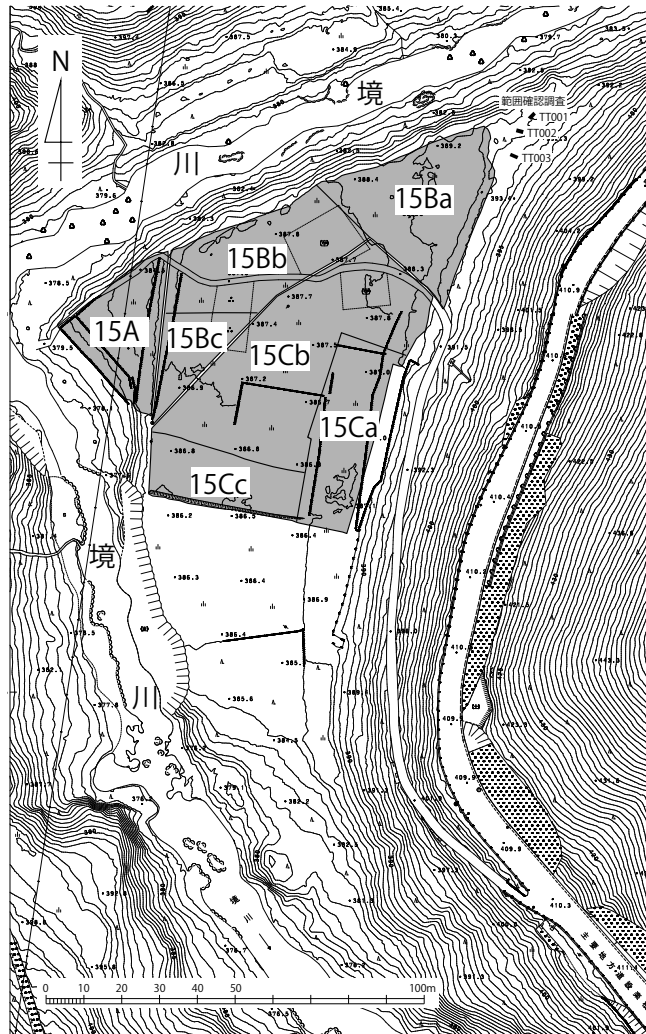


図1 調査区位置図(1:2,000)

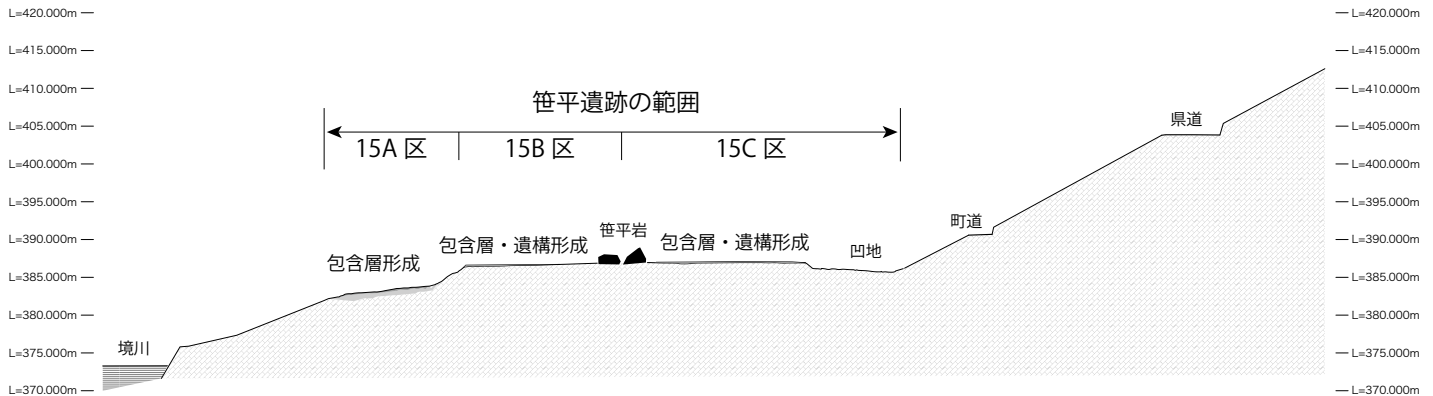


図2 笹平遺跡立地の模式図 (1:1,000)

中期後半の土器出土 摩滅を受け細片化するなど、流れ込みの状況で縄文時代後期の土器片が出土した。さらに褐色砂層の下、15B区側の崖下では、崖際ラインに沿って落ち込みが見つかった。この落ち込み内からは縄文時代中期後半の土器片が、大型破片の状態でまとまって見つかった。土器溜まりであろうか。

B区・C区 B区・C区は段丘の高い部分の調査区であるが、調査区全体が一様な平坦面となっている訳ではない。Ba区は東側丘陵部から連続し、南西のBb区・Bc区に向かって下がる緩斜面となっている。また、Ca区およびCb区南東側は浅い凹地となっており、Cc区は南側に向かって地形が低くなっている。

主要遺構 B区・C区で確認された主要遺構は、以下の通りである。

縄文時代中期後半：竪穴建物跡1棟、柱列1(ピット2基)

縄文時代中期後半から後期(多くは後期初頭～中葉が中心と考えられる)

：竪穴建物跡31棟、竪穴建物跡との関係が不明の炉跡5基、貯蔵穴などの土坑14基、土器埋設遺構5基(炉の中に埋納されたものを除く)、集石遺構10基、柱列2(ピット2基と3基)、掘立柱建物跡1軒、大型石棒および立石を伴うピット4基、礫群1、その他土坑および柱穴多数

晩期前葉～中葉：石敷遺構(炉の可能性もあり)2基、土器棺墓1基

弥生時代前期：土器棺墓1基

古代：土坑1基

遺構の分布 段丘の中心、笹平岩を挟んだ東西、および北側から、竪穴建物跡群と土坑群が集中して見つかった。これらの遺構が展開する範囲は、Ba区南端・Bb区とBc区の全面・Cb区の南東側を除いた区域・Cc区の北端で、地盤の高い範囲に建物跡などの遺構形成が認められてた。

竪穴建物跡 竪穴建物跡の炉跡は、石囲炉跡や石敷炉跡が多く、土器の埋納された炉跡なども見つかった。竪穴建物跡の平面プランは、攪乱などの影響を受けて掘り方が極めて浅くなったものが多いため、その検出は困難であった。炉跡とピット列のみが検出される場合もあり、時期を比定できる遺物が伴うものはあまり多くない。平面プランは、隅丸方形を呈するものが多く、円形プランを呈するものも含まれる。周囲の状況から、多くのものは縄文時代後期初頭から中葉に属するものと想定される。各遺構の新旧関係などは図3に記した。ここでは、竪穴建物跡の中でも特徴的なものについてのみ記載する。

Cb区3893SIは、縄文時代中期後半に属する笹平遺跡で最も古い段階の竪穴建物跡である。長辺4.8m・短辺4.6mを測る隅丸方形プランを呈するもので、深さは検出面から約50cmを測る。埋土中からはまとまった土器片・石器が出土しており、堆積の状況から北側

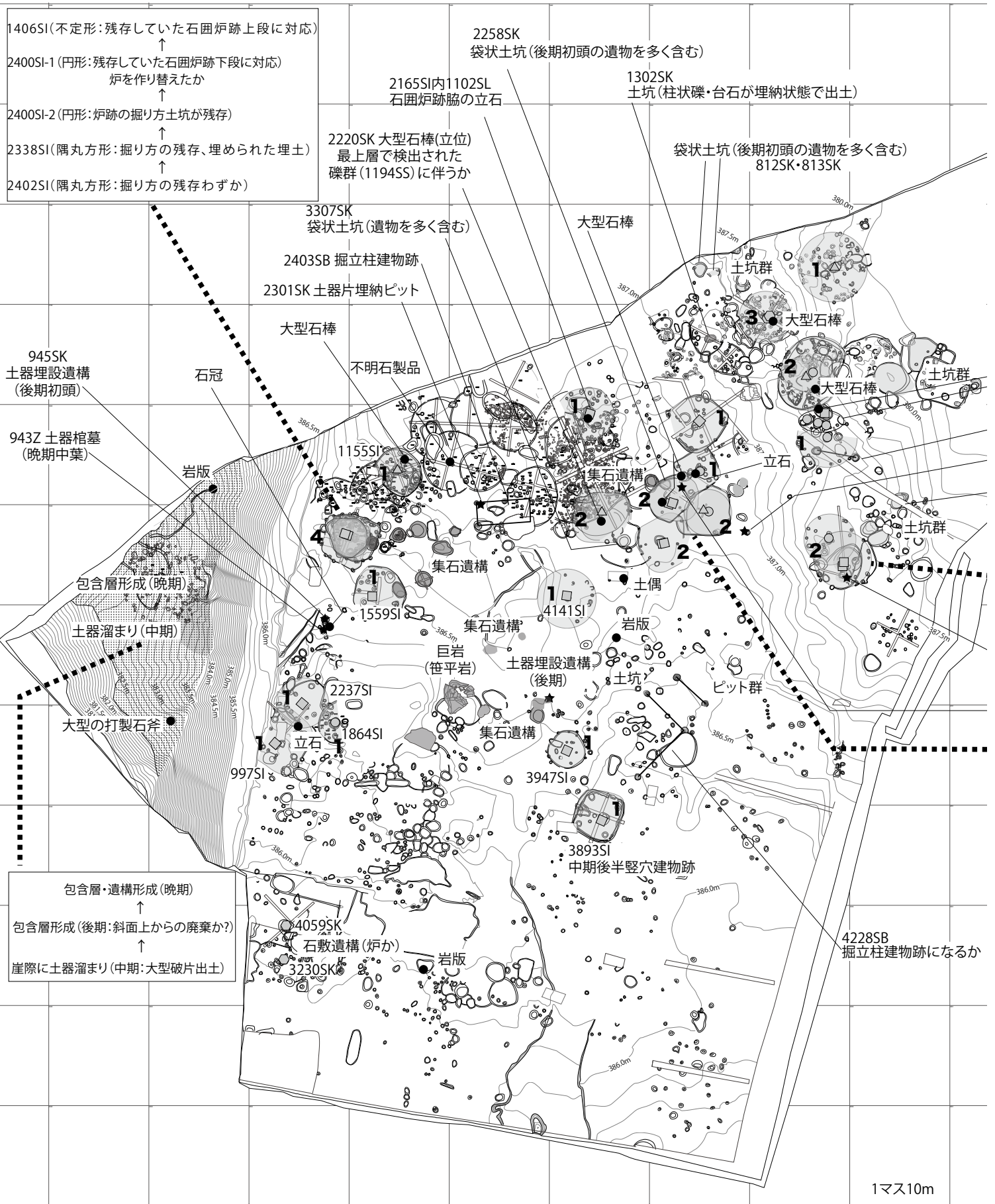
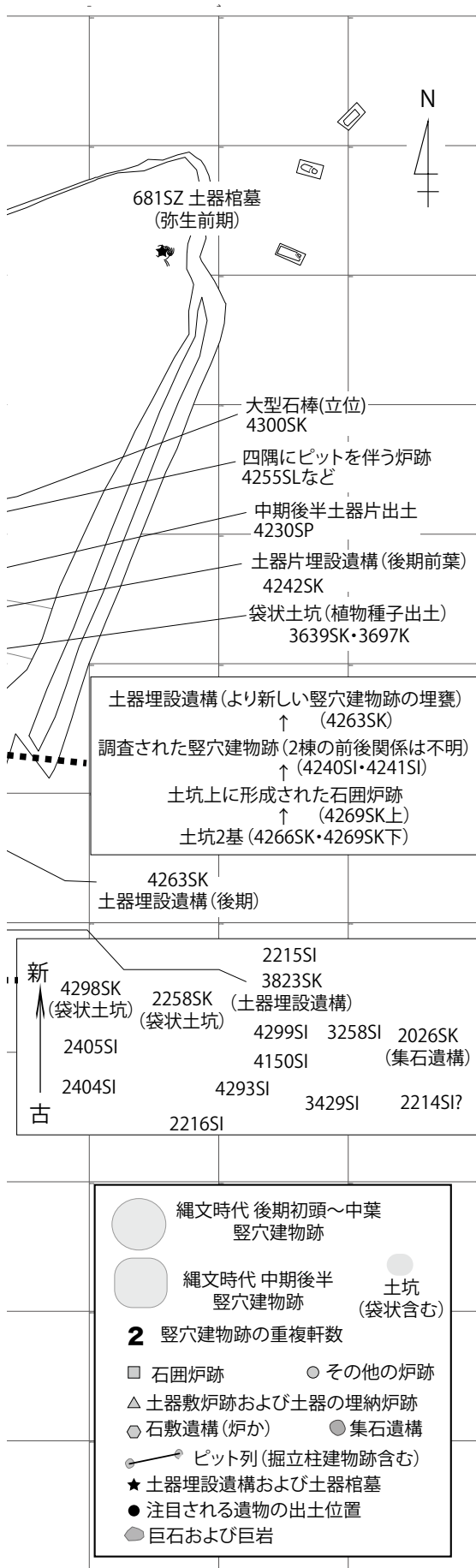


図3 遺構全体図 (1:500)



より廃棄されたものと考えられる。床面を検出した結果、中央に石囲炉跡、四隅に主柱穴跡、掘り方の下場周囲には周溝が検出された。石囲炉跡は中央よりやや東側に存在しており、掘り方は一辺1m20cm四方で、40cmを測る深さの中に、上下2面の機能面が確認された。この西側には巨礫を含む浅い土坑状の遺構が見つかり、入り口部の痕跡かもしれない。主柱穴跡の掘り方は径60cm・深さ50cmほどを呈する。壁溝は溝に平行して土層断面を確認したところ、小ピットの連続を確認することができたことから、壁には細い柱が立てられていたことを確認された。

Cb区3947SIは、径3.8mほどのやや不整な円形を呈する竪穴建物跡で、掘り方は深さ20cmである。中央には7基ほどの柱穴があるほか、掘り方周囲に沿って壁柱列が検出された。中央には一辺50cm四方・深さ25cmの掘り方を有する石囲炉跡が配されていた。この石囲炉跡は、薄い板状石が4枚方形に配置されたもので4141SIの3628SLも同様の構造である。

Ba区にほど近い、Bb区とCb区の境では、袋状土坑・土器埋設遺構・集石遺構のほか、計10棟の竪穴建物跡が重複していることが確認された。これらの中で、Bb区2216SIが最も古いものである。2216SIは、一辺が5mほどの隅丸方形プランを呈するもので、最も深いところで20cmの掘り方を確認することができた。床面中央には炉跡、四隅には主柱穴跡、掘り方内の壁際下には壁溝が確認された。炉跡は、長軸130cm・短軸100cmを測る不整形な楕円形の掘り方内に角礫が配されたもので、この中から後期初頭に属する深鉢土器片が多数出土した。4293SIと4299SIとはほぼ同じ場所に重複する竪穴建物跡である。それぞれ、3320SLと3303SLという石囲炉跡を有しているが、3320SLの上に3303SLが重複しており、3303SLの石囲いの一部は3302SLの石囲礫をそのまま利用している様子が確認された。3429SIと3258SIも、4295SLと3294SLというそれぞれの炉跡が上下重複した状態で見つかった。3294SLは深鉢胴部二個体が入れ子状に埋設された炉跡である。

Cb区北東端では、径1mを測る大型の土坑(4266SK・4269SK)と石囲炉跡を有する竪穴建物(4240SI・4241SI)との重複が確認された。大型の土坑4269SKは、その上層に敷かれたように礫が配され、焼土・炭化物を伴うことから、炉跡であった可能性が高い。これら土坑に重複する4240SIの炉跡4152SLは、長軸1mほどを測る石囲炉跡と考え、掘り方縁辺には炉石の痕跡が多数検出された。

Ba区では、788SIと790SIが確認された。788SIは南北方向にややずれて、2棟が重複しているものと考えられる。隅丸方形ある

いは円形プランを呈するもので、一部には壁柱列も確認されている。炉跡はそれぞれに対応する形で2基見つかり、その内の1基は土器敷炉跡である。788SIは、土層断面の観察から3棟の竪穴建物が重複していたものと考えられる。平面プランは円形あるいは隅丸方形プランを呈していたものと考えられるが、確証はない。炉跡は石囲炉で炉内に土器敷きおよび炉体土器が認められた。炉体土器は上下にレベルを違えて複数個体認められたことから、同じ場所での炉の作り替えや重複が行われたと考えられる。石囲炉に使用された礫には、径40cmにも及ぶ大型石棒片も確認された。土器敷きに使用された土器片には後期中葉八王子式の深鉢片が含まれていた。

Bb区西端では、竪穴建物跡が4棟重複した状況が確認された。先行する2402SIと次の2338SIは隅丸方形プラン、次段階の2400SI円形プラン、最も後出の1406SIは不定形である。いずれの竪穴建物跡も南西端にある地山の巨礫に制約を受けている。いずれも石囲炉跡を主体としているものの、2400SIの炉跡と1406SIの炉跡とは重複関係が確認された。(2346SLの上下)。

このように、竪穴建物跡は、繰り返し同じ場所が利用されたようで、上下に複数棟が重なった状態となることから、掘り方のみならず、炉跡の重複例もいくつか認められたことは、多いに注目されよう。

掘立柱建物跡と柱列 Bb区2403SBは、梁間2.6mほどの1間×2間の掘立柱建物跡である。ピットの径は50cm弱、深さも50cmを測る。Cb区4228SBは、梁間5mほどの掘立柱建物跡の可能性はあるものの、関連するピットを確認することはできなかった。Cb区北西端では、径1mほどのピット2基からなる柱列を検出した(4302SA)。特に、それを構成する4230SPの柱痕内からは中期後半の深鉢土器片がまとまって出土した。

袋状土坑 断面袋状を特徴とする土坑群が、Ba区およびBb区とCb区の境付近、Cb区北西端などの特定の場所で複数基がまとまって見ついている。

Ba区では山側と川側で見ついている。川側では、812SKや813SKでは後期初頭の遺物がまとまって出土した。特に、813SKでは、遺構底面から後期初頭の鉢一個体が横位で出土した。

Cb区北西端の3639SKおよび3697SKでは、埋土中で植物種子が散在していた様子を確認した。種子は長軸1cm程度と比較的小型の種類である。

Bb区とCb区の境付近では、2258SKと4298SKから、多量の土器片が出土した。特に2258SKからは後期初頭の土器片がまとまって出土した。

土器埋設遺構 炉体土器以外の土器埋設遺構喉期は5基存在するが、底部に小穿孔あるいは欠損させている場合が多い。Cb区北東部で見つかった4263SKは4240SIの範囲南端に当たり、4240SI中の遺構(埋甕)としても考えられうる。しかし、4263SKはより上面からの掘り込みが考えられるもので、周囲の削平などを考慮した場合、4240SIあるいはその上位に存在したであろう竪穴建物に伴う埋甕の可能性が考えられる。

Bc区945SKは後期初頭の土器埋設遺構である。上位に胴部上半から下半の土器片が、下位に傾斜を違える状態で底部片が出土した。

集石遺構 土坑内に礫が集められている集石遺構は10基確認された。礫が土坑掘り方に投棄された状態のものがある一方で、Bb区2026SKのように被熱礫が立位状態で検出されるものや、同区1238SKのように塚状に重ねられているものもある。集石遺構は、掘立柱建物跡

2403SB 南西側などの特定範囲にまとまりが認められる。

石 棒 お よ び 立 石 大型石棒および棒状礫が、立位状態で出土した遺構が4基確認された。いずれの石棒・棒状礫も被熱していた。土層断面を確認したところ、ピットの柱痕部分の中位から上位に埋設されており、ピット下位から据えられているものは認められなかった。

このうち、大型石棒が立てられていた2220SKは、上面で検出された集石1194SS・1195SS範囲の南端に当たり、これらとの関連も考えられるかもしれない。この石棒は埋設前にはすでに敲打により切断されたものと考えられる。

Cb区の4300SKは炉跡4255SLに付属するものと考えられる。この周囲では炉跡の可能性のある浅い落ち込みの角に、ピット状の落ち込みが見つかっており、炉跡脇に立てられたものの可能性もあろうか。

土 器 棺 墓 Bc区943SZは、晩期中葉に属する土器棺墓で、棺身はやや甕形を呈する深鉢を立位埋設し、口縁側には別個体の深鉢口縁部が天地逆に埋設されていた。上の土器は口縁から10cm程度しか残存していないものの、後世の削平を考慮すると、少なくとも胴部中位まではあったかもしれない。棺内には、深鉢底部が二個体、正位で上下に存在していた。そのうちより下位から出土したものは縄文時代後期の深鉢の底部であり、何かの意図をもって土器棺埋設時に入れられたものと考えられる。

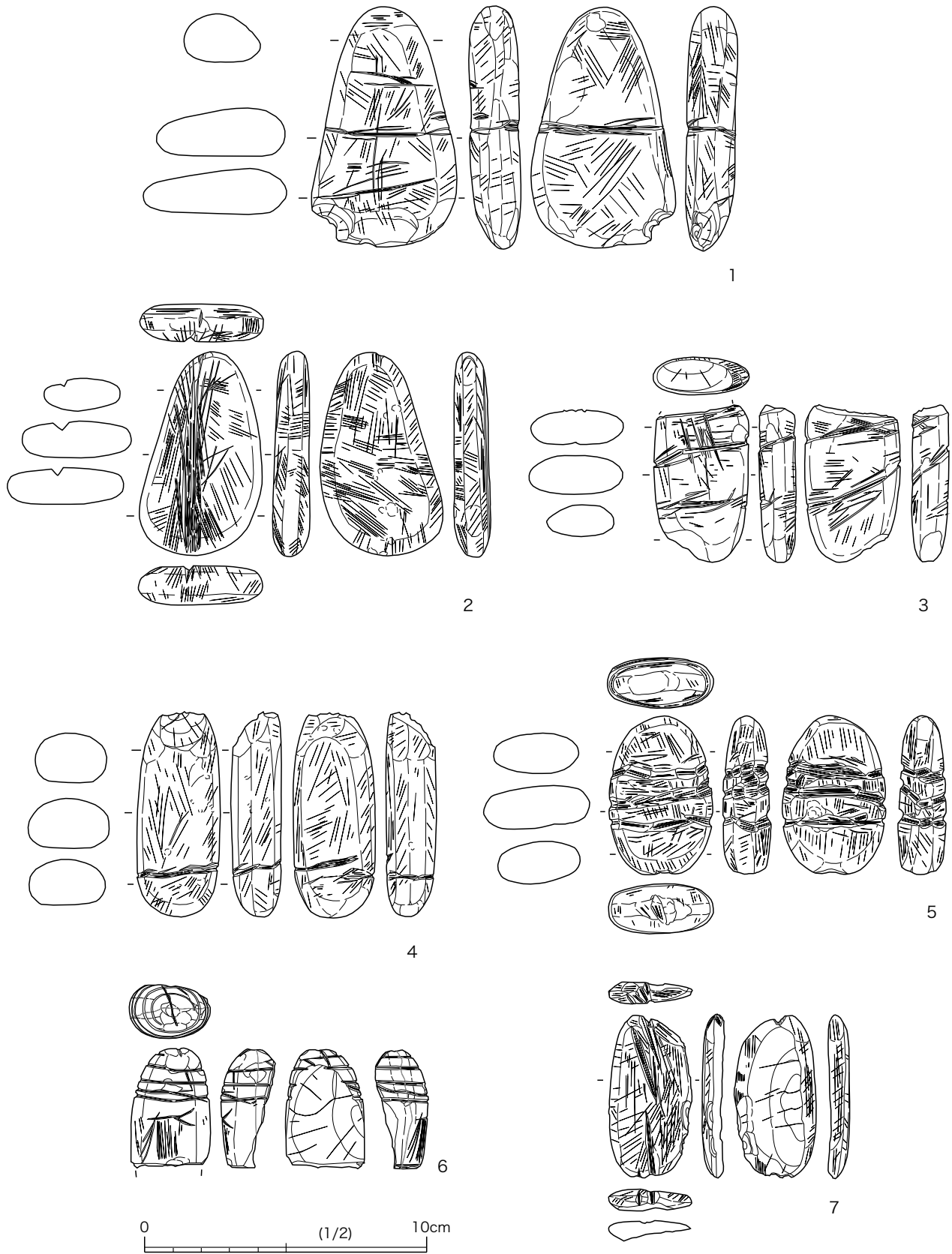
Ba区681SZは、弥生時代前期の土器棺墓で、棺身は横位埋設した大型壺で、半分欠損させた口縁部付近を中心に、深鉢の大型破片で包み込むように蓋をしたものである。棺身の壺には胴部に小穿孔が施されていた。この部分は横位埋設状態の上側に当たる。壺の内部には、埋設時の底面側を中心に、炭化物の付着が激しく認められた。掘り方底面には礫が置かれており、棺の埋設時に安定させたようである。

出 土 遺 物 出土した土器には、縄文時代早期・中期・後期・晩期、そして弥生時代前期のものが確認された。その中でも、特に後期初頭から晩期前半の遺物が多く、器種としては、深鉢・浅鉢・注口土器がある。晩期では大洞系土器や榎原文様を有する浅鉢などが出土している。土製品では土偶の胴部片や手足部分が出土しているが、極めて少ない。

石器には、石鏃・石錐・スクレイパー・打製石斧・刃器・礫器・磨製石斧・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・磨石敲石類・石皿台石類・石鋸(擦切具)が出土した。この調査に限って言えば、石鏃を中心とする小型剥片石器類の出土が少なく、表層に集中しているようである。打製石器としては打製石斧や礫器などの大型の石器に対応する安山岩が多量に出土しており、それに由来する原石・石核・剥片が遺跡全体で見つかった。磨製石斧については、敲打(製作)途上のものも出土している。いわゆる石錘としては有溝石錘が10点以上とまとまった出土をみた。今回の調査で、凝灰質砂岩製の擦切具の出土を見た。愛知県下では、豊田市馬の平遺跡で1点採集されており、本例が2例目になる。

また、石製品には、石棒石刀類・石冠・岩偶岩版類・独鈷石があり、なかでも線刻礫を含む岩偶岩版類は今回の調査で6点確認された。奥三河郷土館に所蔵されている2点を合わせると計8点となり、1遺跡での岩偶岩版類の出土量は県内で最多となる。

ま と め 今回、笹平遺跡(集落)のすべてを調査したことにより、巨石「笹平岩」を挟み、地形に沿って展開した縄文時代の集落のあり方を解明する良好な資料を得ることができた。遺跡の規模や内容から、設楽山間部の縄文時代後晩期を代表する遺跡の調査事例となったといえよう。(川添和暁)



1～6:岩偶岩版類(泥質凝灰岩)、7:線刻礫?(凝灰質砂岩)

図4 笹平遺跡出土遺物 1

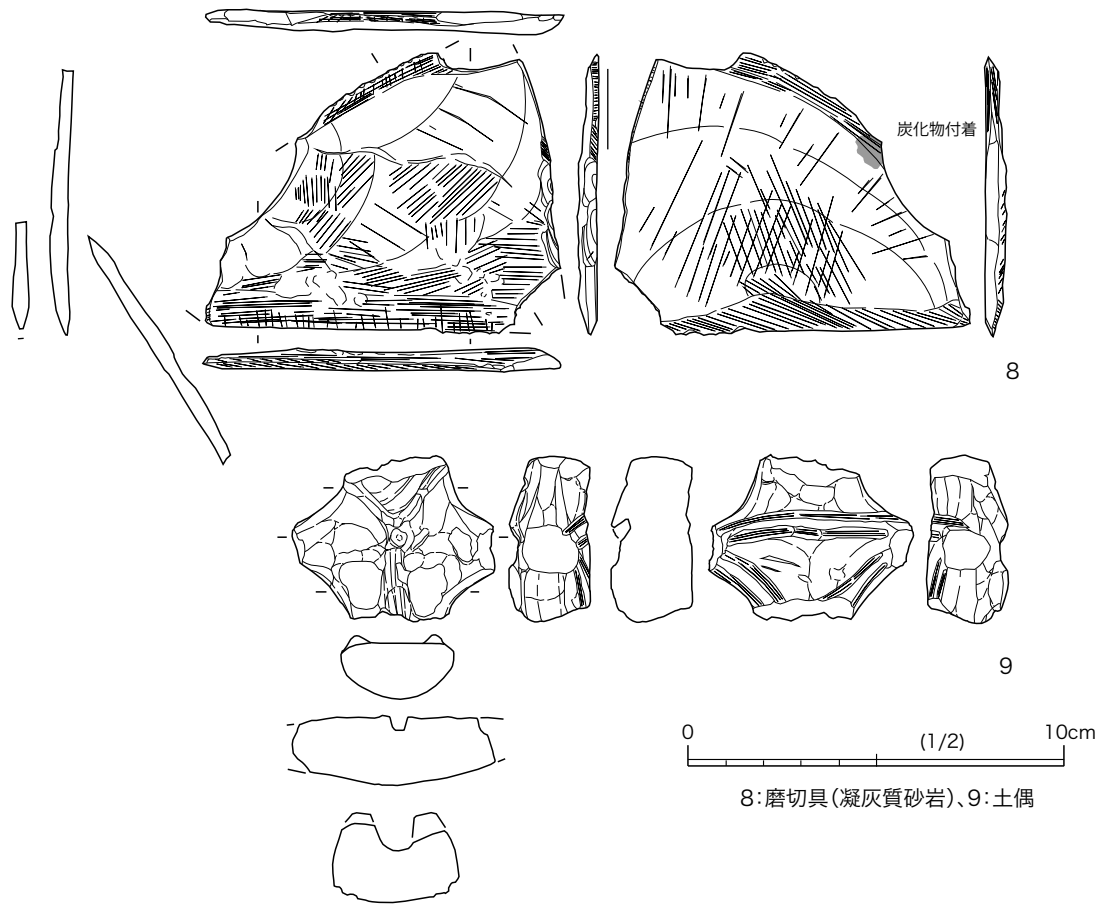


図5 笹平遺跡出土遺物 2



笹平遺跡出土遺物 (大型石棒・石棒石刀類・独鈷石・石冠・岩偶岩版類)



調査区遠景（西より）



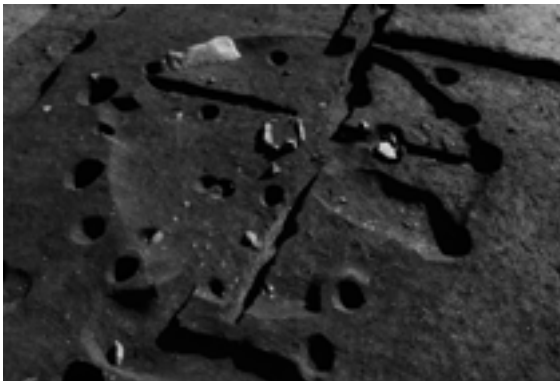
調査区全景（北より）



Cb 区 3893SI（北より）



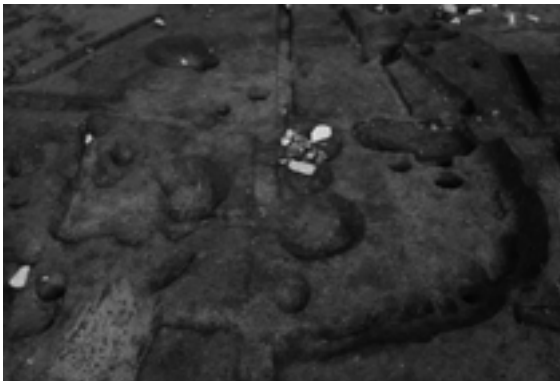
Cb 区 4230SP 土層断面（南より）



Cb 区 3947SI（北より）



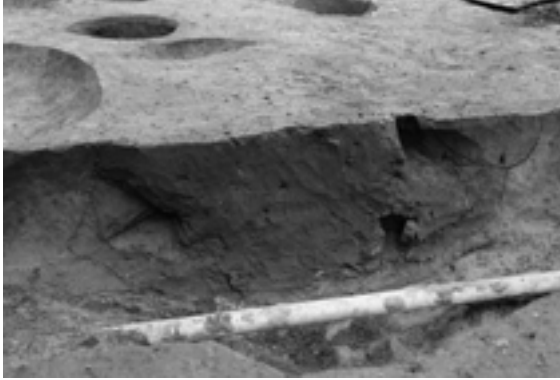
Bb 区 2258SK 遺物出土状況（北より）



Bb 区 2216SI（東より）



Bb 区 2216SI 炉跡（2319SL）遺物出土状況（北より）



Cb 区 3697SK 土層断面（東より）



Cb 区 4255SL（南より）



Bb 区 2220SK 土層断面（南より）



Bc 区 2278SK 土層断面（南より）



Cb 区 4263SK 土層断面（東より）



Cb 区 4129SK 土層断面（東より）



Bb 区 1238SK（西より）



Bc 区 943SZ（南より）



Ba 区 681SZ（南より）